

## 文化財の資料学的研究 (①企02-12-2/5)

### 目 的

本研究は、日本を含む東アジア地域の美術を対象に、人とモノとが複雑に絡み合って多様に展開する価値形成のしくみの解明を行うことを目的とする。その研究にあたっては、近年の記録媒体や分析手法等の進展に対応しながら、調査研究を行い、文化財を対象とする資料学的基盤の整備と確立を目指すとともに、これに立脚した、国内外の研究交流を推進する。

### 成 果

#### 1. 調査

2012（平成24）年5月11、12日に、熊本県立美術館において横山大観《山路》の調査・撮影を行った。

#### 2. 美術史研究のためのコンテンツの形成

当研究所OBによってカード化されている古記録・文献史料記載絵巻関係資料のデータ化を引き続き行った。また、東京文化財研究所が所蔵する今泉雄作『記事珠』の翻刻・訳注を進めた。

#### 3. 研究交流促進のための研究会の開催

2012（平成24）年4月5日にユベール・ギメ氏（フランス・ギメ美術館理事）による講演会「エミール・ギメ ウルトラムリンからギメ美術館創立へ」を開催した。

#### 4. 研究成果報告書の作成

2012（平成24）年8月3日に進捗状況の確認を兼ねて研究協議会を開催し、2013（平成25）年3月に『美術研究作品資料』の第6冊として『横山大観《山路》』の編集を行い、刊行した。

塩谷純「《山路》研究の経緯」

塩谷純「《山路》のあゆみ—画家の手から蒐集家の手に至るまで」

竹上幸宏「《山路》修理報告」

荒井経、小川絢子、平論一郎「岩絵具の新表現—《山路》の材料と技法」

三宅秀和「永青文庫所蔵本《山路》の画面」

林田龍太「《山路》と洋画」

佐藤志乃「《山路》をめぐる言説」

野地耕一郎「《山路》と高山辰雄」

### 研究組織

○津田徹英、田中淳、山梨絵美子、二神葉子、綿田稔、小林公治、塩谷純、小林達朗、皿井舞（以上、企画情報部）、江村知子（文化遺産国際協力センター）、中野照男、吉田千鶴子、相澤正彦、三上豊、森下正昭（以上、客員研究員）

## 「保存科学」52号の出版 (⑥保修09-12-2/5)

国立文化財機構所属研究員等による文化財の保存と修復に関する科学的調査、研究、受託研究報告等の論文、報告及び修復処置概報等を掲載している。52号には報文4本、報告22本を掲載した。



## 第35回文化財の保存及び修復に関する国際研究集会報告書 (⑥無05-12-1/1)

『第35回文化財の保存と修復に関する国際研究集会報告書 染織技術の伝統と継承—研究と保存修復の現状—』

本書は、2011（平成23）年9月3日～5日に開催された国際研究集会「染織技術の伝統と継承—研究と保存修復の現状—」の成果論文集である。「染織技術を守る」「染織品保存修復のいま」「染織技術へのまなざし」「染織技術をつたえる」という4つのテーマに基づき、各発表者による原稿と総合討論のテープ起こし原稿を掲載している。284ページ。



## 『横山大観《山路》—美術研究作品資料第6冊』（①企02の一環として実施）

企画情報部のプロジェクト「文化財の資料学的研究」の報告書。横山大観《山路》（永青文庫蔵）の調査研究をまとめ、2002（平成14）年以来、逐次刊行してきた『美術研究作品資料』の第6冊とした。

近代日本画の巨匠として知られる横山大観が1911（明治44）年の第5回文部省美術展覧会に出品した《山路》は、発表当時、西洋の印象派と南画の融合と評されたタッチを多用することで、明治30年代に大観らが試みた朦朧体を脱し、大正期に流行した“新南画”の先駆けとなったといわれる重要な作品である。2010年より「永青文庫常設展示振興基金」による事業の一環として同作品が修理されるにあたり、当研究所では永青文庫との共同研究として、《山路》に関する多角的な調査研究に取り組んできた。修理の過程で得られた新知見や顔料調査の結果、及び発表当時の批評等、本調査の過程で得られた諸研究成果の集成をめざしたのが本書である。2013年3月刊行。99ページ。



## 『伊藤若冲「動植綵絵」蛍光X線分析結果』（①保修01の一環として実施）

宮内庁三の丸尚蔵館が所蔵する伊藤若冲『動植綵絵』全30幅は、平成11年度から6か年にわたって修理が行われ、その修理過程において東京文化財研究所は宮内庁三の丸尚蔵館と共同で蛍光X線分析による非破壊・非接触の彩色材料調査を実施した。1000ポイント近くの調査が行われ、本書ではその全データを収録した。調査によって明らかになった30幅全体を通じた彩色材料の特徴、及び各幅の特徴についても詳細に解説した。

